大人になれなかった弟たちに……(1)

米倉　斉加年

（「僕」の弟はヒロユキといい、「僕」が小学校（国民学校）四年生のときに生まれた。「僕」の父は戦争に行っていたため、「僕」は母、祖母、妹、弟とともに五人で暮らしていた。）

　そのころは食べ物が十分になかったので、母は僕たちに食べさせて、自分はあまり食べませんでした。でも弟のヒロユキには、母のお乳が食べ物です。母は自分が食べないので、お乳が出なくなりました。ヒロユキは食べるものがありません。おもゆといっておかゆのもっと薄いのを食べさせたり、やぎのミルクを遠くまで買いに行って飲ませたりしました。

　でも、ときどき配給がありました。ミルクが一缶、それがヒロユキの大切な大切な食べ物でした……。

　みんなにはとうていわからないでしょうが、そのころ、甘いものはぜんぜんなかったのです。あめもチョコレートもアイスクリームも、お菓子はなんにもないころなのです。食いしん坊だった僕には、甘い甘い弟のミルクは、よだれが出るほど飲みたいものでした。

（中略）

僕は隠れて、ヒロユキの大切なミルクをぬすみ飲みしてしまいました。それも、何回も……。

　僕にはそれがどんなに悪いことか、よくわかっていたのです。でも、僕は飲んでしまったのです。僕は弟がかわいくてかわいくてしかたがなかったのですが、……それなのに飲んでしまいました。

戦争中の状況

ヒロユキが生まれた頃は、アメリカのB29による空襲が毎日のようにあり、毎晩、「僕」の家族は、ゆかの下に掘った防空壕で寝ていた。

　戦争中は食料が十分になく、その他の物資も不足していた。米などの生活必需品の販売は政府に統制されており、生活必需品は消費者ごとに量を割り当てて配給された。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うように、次の文の（　　）に入る言葉を本文中から二字で書きぬきなさい。

戦争中は食料が不足しており、ヒロユキにはおもゆを食べさせたり、遠くまでやぎのミルクを買いに行って飲ませたりしていた。また、ときどき、ミルク一缶の（　　）があり、これがヒロユキの大切な食べ物だった。

□□

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 母は子供たちに少しでも多く食べさせようと、自分はあまり食べなかった。

イ あめやチョコレートといった甘いものは、ときどきしか手に入らない貴重品だった。

ウ 一缶のミルクは大切な食べ物で、母は「僕」と弟にミルクを優先的に割り当てていた。

〔　　〕

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア そのころの「僕」は、おいしそうなミルクを飲む弟をにくらしく感じていた。

イ 甘いものが欲(ほ)しい「僕」は、弟の大切なミルクを何度もぬすみ飲みしてしまった。

ウ まだ小さかった「僕」は、ミルクを飲むことが悪いことだとは当時はわからなかった。

〔　　〕